

刹那に

あ、つつい。

暑い。ただひたすらに暑い。全力で殺しに来てる。

ミンミンミンミンとかいうけどね、実際ミンミンじゃないわよ。ジーンよジーン。あー、蟬うつさい。

夏休み中、遊びにおいでって言うのはいいけどさ。留守にするなら言つといてよね。華の女子高生の姪が、せっかく友達との約束を蹴って、京都にあるおばさんちに遊びに来たつてのに。

インターホンを押しても、玄関で呼んでみても、返事はなし。携帯でも連絡とれないし。仕方ないから、スーツケースはドアの前に置いて、誰か帰って来るまでうろうろすることにした。財布と携帯は持ってきたし、盗られて困るもんはない。

にしても。

「ひいじいちゃんの弓を譲ってくれるって言うから、来てあげたのに……ほんと最悪」

あたしは弓道部に所属している。夏休みにも部活の予定は入ってた。でも、部活の貸し出し用じゃなくて、自分専用の弓矢が持てるって誘惑には抗えず。

まあ、その人によってピツタリな弓って違うらしいから、ひいじいちゃんの弓矢はあたしに合わないかもしれないけど……

そのときはそのとき、つてことで。

「どっか、涼しいところないかな」

下手に遠くに行つて帰れなくなつても困るし、当てもなく歩いてく。観光で来るなら、古都の街並みつてのものなかなか魅力的なんだろうけど、今あたしが欲してるのはそれじゃない。

午前十一時半。クーラーの利いたファストフード店はどこもかしこも人口密度がハンパない。それに加えて、京都の怖いところって、普通にあるお店屋さんの値段が普通じゃないところ。行くとこ、マジで皆無。

……そんな、わけで。

誰でも立ち寄れて、しかも何も買わなくてよくて、京都にはいっぱいある場所——そう、神社にあたしがふらふら入つて行ったのは、必然といえは必然だった。

「うつわ、天国」

思った通り、森に引付くようにして建つ神社の敷地内は涼しかった。名前はわかんないけど、なかなか有名な神社らしい。

人がいっぱい鳥居をくぐっていく。あたしも脇に灯籠の並ぶ石段を上つて、鳥居の前に立つと、神社の中を覗き込んだ。

鳥居の先は背の高い杉林。白い石畳の道がすうつと伸びてる。ところどころ道が分かれて、祠とかやたらでっかい木とかに通じてるみたい。真っ直ぐ行くと、森へ行く道。朱塗りの小さな

橋を渡ることになる。

「……あれ？」

橋の上に、知り合いの姿が見えたような気がして、あたしは目を細めた。

長い黒髪を腰のあたりで束ねた男の人。男の人だと思ったのは、Tシャツから覗く腕が、遠くから見てもわかるほどガッチリしていたから。

長いものを入れた布袋と、細い円柱の筒を背負っている。あれ、多分弓矢だ。

まさか。

「眼さん……？」

その人は橋を渡り終え、あつという間に森の中へ入って行ってしまふ。あたしは慌てて石畳の道を走り出した。

間違いない。あれは、眼さんだ。

まさか、彼も京都に来ているだなんて！

眼さんっていうのは、あたしの弓のお師匠様。

高校から弓道を始めたはいんだけど、超がつくほどヘタクンだったあたしは、お母さんの勧めで、開放されている近所の弓道場に通うことにした。その持ち主が上星眼さん^{うえぼし}で、あたしは週に一回、彼に弓道を教えてもらっている。

今年でちょうど八十歳になるらしいけど、全然そうは見えない。

い。背筋はしつかり伸びてるし、白髪も数えるほどしかない。

まあ、若く見えるのは、童顔なせいもあるだろうけど。

基本、無駄話はしない。しかもニコリともしない、厳しいおじいさん。でも、ド下手なあたしに、弓道のなんたるかを教えてくれたの。

眼さんのおかげで、あたしは色んな面で成長できた。

まさに、人生のお師匠様なんだ。

朱塗りの橋までは、ざつと五百メートルはある。あたしが橋に足をかけたときには、眼さんの姿はどこにもなかった。

だけど、そこで諦める気にはなれなかった。あたしは橋を渡り、森の中に入った——……。

「いッ……」

ギン、と頭の奥に鋭い痛みが走り、あたしは思わず足を止める。

「……気のせい、かな」

痛みは一瞬だけだった。なに、熱中症？ いや、それだったらこんなもんじゃないはず。あたしは一、二回軽く頭を振ってから、何ともないのを確認して、再び眼さんを追って走り出した。

『え、上星さんが？』

あたしが眼さんから弓道を教わると聞いて、お父さんは驚いたようだった。

『確かにかなり上手い人ではあるらしいんだけど、弟子をとったっていう話は聞いたことがないな』

『あら、そうなの？ 弓道場を持つてらっしゃるから、てっきりお弟子さんの一人や二人、いると思つてただけだねえ』

これはお母さんの言葉。

『いや、あの弓道場は普段、上星さんとその親族の方しか使わないんだそうだ』

『……由貴に素質があると思つたのかしら？』

素質なんて、ない。現にあたしは、弓道を初めて一年以上経つた今も、的に矢があたらないことが多い。

選手にも選ばれないし、未だにヘッタクソ。

それでも、眼さんはあたしに教えてくれている。一度も怒ることなく、繰り返し、繰り返し。

「眼さんっ」

森の中に反響する、あたしの叫び。なぜか橋を渡った後は、全く人に会わない。それにものすごく静かで、あんなにうるさかった蟬の声すらも、今は懐かしく感じる。

道のつくりも、橋の前まで石畳だったのが、森へ入ると砂利

になつていた。ぐにやぐにやと曲がりくねつていて、先に何があるのか全くわからない。

トドメに、段々と暗くなつてきた気がする。確かに森の中って薄暗いもんだけど、この肌寒さと暗さはちよつと……おかしく、ない？ 眼さんからの返事もないし、もしかしたら。

「見間違い、だったのかなあ」

鳥肌が立つてきた腕をさする。ここ、入っちゃいけないところなのかもしれない。場所が場所なだけに、さすがに気味悪くなつてきた。

「帰ろ……」

ぐるりと辺りを見回した後に、あたしはぐにやぐにやの道を引き返した。そして、またしばらく歩く。

歩く。曲がる。歩く。曲がる。歩く。曲がる。もいちよ曲がる。歩く。歩く。曲がる。歩く。曲がる。歩く。歩く。歩く。曲がる、歩く、歩く歩く歩く……。

止まる。

いくら歩いても、森の入り口にあつた橋にたどり着かない。あたし、そんなに奥までは行つてなかつたはず。

心臓が嫌な音を立てる。首筋を、冷たい汗が滑り落ちた。

「……」

いや、ありえない。絶対、そんなわけない。あたし、ちよつと迷っただけだ。

——一本道なの？

人を必死に追いかけてきたんなら、そういうこともあるよ、多分。だって、だってそうでもないかと、これって。

携帯を取り出す。お約束なことに、圏外だった。ちよつと、しつかりしてよソフトバンク。

がああ。

低いカラスの声。あたしは振り向いて……そして、愕然とする。目の前に分かれ道ができていた。

一本は、細い石段の上り坂。もう一本は、闇への道。

どっちの道も、通ってきた覚えはない。今あたし、振り向いたはずなのに。

それに。

闇へ続く道の入り口に、四つん這いの黒い何かが、いる。

ただ真っ黒。目らしき光もない。真っ黒に塗られた人が、四つん這いになってる感じ。

もつごまかしてられない。

……これは、ヤバイ。

『弓矢は歴史のある武器だ。この数千年間、多くの命を狩りとってきた』

眼さんは最初、こんなことを話してくれた。

『無論、わたしたちは誰かに向けて弓を射るということはない。

礼儀と精神の修業のために、弓道を極めることとなる。ここで学んだことは必ずや、お前のこれからの人生の糧となるだろう』

ぴりぴりと張り詰めた空気。

めまいがするほどの緊張感。

容赦のない重圧。

『だがわたしは、お前に弓道をやれと強要するつもりはない。

いい加減な気持ちでやるくらいなら来るな。本気で弓道がやりたいと、そう思ったときだけここに来い』

……そうよ。

ナメてんじゃないわよ。こちら、週一で怖いおじいさんのとこに通ってるの。そんで、何度も何度も緊張状態に身を置いてきてるの。泣き黒子^{ほくろ}ある人は涙もろいって言うけど、あたしは違うんだからねっ！

戻っても無限ループするだけで、分かれ道しか道がないってんなら……坂道、駆け上ってやろうじゃない！

あたしは四つん這いのヤツと目（そんなもんないから、どっちかっていうと顔^{かほ}だけど）を合わせないようにしながら、坂道を駆け上り始めた。

がああ、がああ。

カラスの声が近くなる。恐怖で冷たくなる体に鞭打って、あたしは走り続ける。

があがあがあ。

さすがに、カラスに行く手を阻まれると立ち止まった。目の前にいるやつだけじゃない、いつのまにかカラスが何十羽も集まってきた、あたしのことをじつと見てる。

そして、一気に飛び立つ。……あたしの方に向かって！

「――ひ、」

ホントに怖いときって、悲鳴が喉に張り付くらしい。声が、出ない。心の中じゃ絶叫中なのに。

こんな風になるくらいなら、少しくらい暑さ我慢して、おばさんの家の前にいるんだった。

目をつむることもできないまま、固まっていたとき。

びいん。

弦の音が、力強く響いた。

「大丈夫ですか！」

同時に男の人の声が降ってくる。二十くらい、かな。結構若い声。とりあえず、眼さんの声じゃない。

びいん。また聞こえた。見上げると、坂の上に弓を持った人が立っている。彼が、弓の弦を指で弾いてるみたい。え、弓って楽器にもなるの？

弦の音が響くたび、カラスたちが散らばっていく。あたしは

すっかり安心して、へたりこんでしまった。男の人が近づいてくる。その姿を見て、あたしは思わず声をあげた。

「ま、眼さんっ？」

その人は、確かに若かったんだけど……童顔の顔立ちといい、長い髪といい、眼さんそっくりだった。というかあたしが追いかけてきたのって、もしかしてこの人？

「え？」

男の人は驚いた顔で聞き返した後に、こう口にした。

「じいちゃんを、ご存じで？」

数分後。辺りはますます薄暗くなり、霧がかかってきた。

あたしとその人は小さな祠の前にいた。坂道を登り終えた先にあつたものだ。男の人が「近くに湧き水が流れてますし、比較的安っぽいで、ここで休憩しましょう」って言うから、ベンチとかはないけど一休みすることにしたんだ。

「あの、先ほどは助けてくださって、ありがとうございます」水で喉を潤すと、あたし、深々と頭を下げる。座れる場所を探してくれていた男の人は、それに気づくと首を振った。

「いやいや、遅れてしまつてごめんなさい。もつとはやく気付くべきでした。まさか一般人が迷い込んでいたなんて」

一般人。ってことは、この人は一般人じゃない、と。

まあ、弓の弦を弾いてカラスを追ひ払うような人が、一般人

なわけないか。格好はテラードジャケット（見たときはＴシャツだったけど、寒くなったから着たのかも）にジーンズっていう、どこにでもいそうなものなんだけどな。

「俺は上星瞬といいます。日本本部のメモリートです」

「あ、あたし、池川由紀です」

いけない、恩人に名乗らせてしまった。あたしも自己紹介する。

「もしかして、眼さんのお孫さんですか？」

瞬さんはうなずいた。うん、それなら納得。そっか、メモリートのお孫さんがいるとは聞いていたけど、こんなに似ていらしたんだ。

上星家つてのが代々メモリートの家系なのは、うちの近所じや有名な話だ。だって、すっごいお屋敷なんだもん。弓道場を持つてるって時点で普通の家じゃないけどさ。

メモリートの話は新聞なんかにもよく載ってるし、どういふものか知らない人もいるみたいだけど、あたしには身近な話。

「あたし、眼さんに弓を教えてもらってるんです。今日は親戚の家に遊びに来てたんですけど、えっと、散歩中に瞬さんを見かけて。眼さんだと思って、追いかけてちゃったんです」

「ああ、なるほど」

冷静に考えてみると、あんな目に遭ったのも自業自得なわけ。だけど瞬さんは、申し訳なさそうな顔をした。

「つてことは、俺が巻き込んだんじやったんですね」

「あ、いえ、そういうつもりじゃ……」

「責任もつて、絶対に元の空間に送り届けます」

にこ、と笑う瞬さん。ただでさえ童顔なのに、笑うとさらに幼い顔つきになる。

「元の空間、ですか？」

「ええ、薄々気づいてらつしやるとは思いますが、ここは普通の空間ではありません。人間がいてはならない空間です」

確かに気付いてはいたけど、なんでそんなとこ、迷い込んだんじやったんだらう。

「ここに来る途中で、何か変なものを見ませんでしたか？」

「変なもの？」

「真っ黒な、四つん這いのヤツとか」

見た。バツチリ見た。思い出すだけで寒気が走る。

あたしがガクガクとうなずくと、瞬さんは真面目な顔をして説明してくれた。

「アイツは、俺がここまで追い込んだきたヤツなんです。ちょっと前までは町のど真ん中にいたんですよ。『記録』を見たところ、ここから来たモノらしいので、とりあえず追い返してみました。もしかしたら、そのまま帰ってくれるかもしれないので」

途中、困った様子で頭をかく。

「でも、アレはここから迷い込んだんじゃないくて、ここで生ま

れたものみたいです。その証拠に、生まれ故郷に帰って来たことによって力が強まって、俺たちをここに閉じ込めるまでになつてしまった」

……ん、どゆこと？ あたしは首をかしげる。

「えーつとですね。最初俺は、ソイツがどうか別の世界から、この神社のどこかに開いた穴を通して来ちゃったと思つてたんです。だから、神社まで誘導してきて、そのまま帰ってもらおうと思つた。ここまでは大丈夫ですか？」

「はい」

「でも、そうじゃなかったんです。ここに穴は開いてなくて、ただ単にソイツはここで生まれたものでした。生まれ故郷に戻つてくるとパワーアップするヤツっているんですけど、ソイツがまさにそれで……『敵』認定していた俺を、自分の作つた空間に閉じ込めました。例を言うと、誰かが作つたテントの中に閉じ込められた感じですよ」

あーつと。うん、ぼんやりとだけど、分かつた気がする。あたしがうなずくと、瞬さんも「よかつた」と言つてニコツと笑つた。

「とりあえず、アレを倒せば元の世界には戻れます。俺が『記録』を見て探してきますから、池川さんはここにいてください」

「え」

血の気が一気に引く。何、あたし、また一人になるつてこと？

ホラーゲームの主人公じゃあるまいし、余計な死亡フラグは立てたくないんだけど。

瞬さんは慌てて言つた。

「大丈夫です、一人にするわけじゃありません。ちゃんと俺の分身を置いていきます」

「……へ？」

ジーンズのポケットから、ケースに入れられた小さなハサミを取り出す瞬さん。そして何をするかと思えば、長い髪の毛を一本切り取つて、ぎゅつと握りしめる。額に当てて強く念じてから、ふつと息を吹きかけた。

手から落下していく、髪の毛。

地面に落ちる、と思つたとき、そこには髪の毛はなく、一人の青年が立つていた。

「上星家の能力は【髪分身】です。俺もじいちゃんも、別にお洒落で髪を伸ばしてるわけじゃないですよ。分身の依り代とするためなんです」

瞬さんは苦笑する。見ると、髪の毛でできた（？）青年は、姿かたちがまんま瞬さんだった。違う点といえば、色素が全体的に薄いことくらい。目は赤茶色で、髪はダークグレー。肌も白に近い。本人と並べても、ちゃんと見分けがつく。

「分身一人じゃ心もなくなる思われるかもしれませんが、すでにこの森じゆうに分身を散らしていますし、『記録』を見るときは

俺が無防備になるので、どうしても分身を見張りに立たせなきゃいけません。あまり出しすぎると体力を消耗するんです。すみませんが、我慢してください」

我慢もなにも、十分すぎます。

分身の瞬さんも、真つ白な弓と矢筒を持っている。長さも形状も、瞬さん本人が手にしているものと全く同じ。

これなら大丈夫でしょ。うなずいてみせると、瞬さんはジャケットを脱いで、あたしにかけてくれながら言った。

「護衛用に作った分身です。全力で池川さんを守ってくれますし、何かあったらすぐ俺に連絡してくれますよ」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ、行ってきます」

瞬さんが弓を持ち、矢筒を背負って、霧の中に飛び出していく。あたしは分身の顔を見た。本人に比べてかなり無表情な分身は、強い光を帯びた目でこっちを見ていた。

『どうしてあたしを、弟子にしてくださったんですか』

一度、眼さんに聞いてみたことがある。

答えてくれないだろうなあとと思いながら、それでも一応聞いてみたんだけど、眼さんの答えはこれだった。

『……わたしには、ちょうどお前くらいの年のときにメモリートになった孫がいる。今ではもう成人しているが、当時の孫に

はまだ教えてやりたいことがたくさんあった』

あたしの方を見る。その目は、とても優しくかった。

『孫に教えられなかったぶんを、わたしはお前に教えているのかもしれない。お前のように、血が出るまで唇を噛みしめ、泣きながらもわたしの教えに従う子供だった』

それっきり、お孫さんの話が眼さんの口から出てくることはなかったから、忘れていたのだけだ。

これなら自慢のお孫さんですね、眼さん。

霧も晴れてきて、夜の森の中。相変わらず、重い静けさが漂っている。あたしは地面に体育座りをして、分身は変わらず立っていた。ま、ほっとしましょ。

「心配してるかな、おばさん」

現実世界でも夜になってたら、あたしは失踪したことになってるだろう。それだと瞬さんが誘拐犯ってことになっちゃうんだろうか。

「でも、メモリートだしね。大丈夫か」

ね、と分身に話しかける。分身は喋れないみたいだけど、あたしが話しかけると、ニコニコと笑ってくれた。

「……！」

刹那に。

その笑顔が厳しい顔つきに変わる。何かあったんだ。あたし

も立ち上がる。

どんっ。

分身があたしを押しした。よろけて、再びお尻が地べたに戻ってくるあたし。

目の前に現れる黒い影。近くで見ても、やっぱり口とか目がない。ただ、サイズを見てみると意外と小さかった。分身が後ろから羽交い絞めにし、取っ組み合う黒と白の二人。矢筒が転がり、矢が散らばる。

分身と目が合った。逃げろ、と瞬さんの声が頭で弾ける。

咄嗟にあたし、分身が落とした弓矢を拾って、駆けだした。

うおお、とくぐもった声が聞こえる。少し走った後振り向く。分身が黒いヤツの上に馬乗りになっていた。けれど、すぐにひっくり返される。黒いヤツの顔が、ぎざぎざの形に半分に分れた。もしかして、口？

そのまま分身の喉笛に噛みつく。血を想像したけど、悲鳴も鮮血も飛び散らない。きつと分身だから、痛みを感じたりはしないんだ。分身が手を伸ばし、また取っ組み合う。

分身の顔が見えた。ひどく、苦しそうな顔。必死の形相。さつきまで浮かべていた笑顔がよぎる。

気付くとあたしは、こんなことを考えていた。

もつと二人から離れなきや。ここから撃つても、威力は大したことがない。

そう、あたしは……逃げろという選択肢よりも、戦うという選択肢を選んでた。彼らの大きさがいつも練習で使ってる的くらいになるまで離れると、弓を構える。

普段使ってる弓の重さやサイズじゃないから、やりにくい。ただでさえあたらないあたしの弓矢。不安要素しかない。でも。

「……やら、なきや」

ゆつくりと、弓を引く。散らばってしまった矢は一本しか拾って来れなかった。どうせ一回矢を放ってしまえば、黒いヤツはあたしの方にまつしぐらだろうし……同じよ、同じ。

足が震える。唇を強く噛みしめた。

思い出せ。眼さんの教えを。

眼さんも、いつも一本しか矢をくれないじゃないか。それを撃つた後は、しばらく二本目はもらえない。

『全ての矢を射尽くすことを、射切る、と言う』

あたしの矢はいっだって一本。だから、あたしが矢を放したとき、そのとき持つてる全ての矢は射尽くされて……あたしは射切る、ことになる。

『撃とう、と思ったときの矢に力はない。撃とうと思うな。矢とはいつの間にか放たれている。その瞬間を、わたしたちは感じるができない』

自身の動きが鈍くなり始める。黒いヤツが咆哮した。
あたしはもう弓を引ききっている。いつでも、放てる。

『そして狙うのは的ではない。的と一体化し、自分自身を狙え。己の脈打つ心臓を、その矢で狙うのだ』

意味が分からなかった、言葉。今でも完全にわかってるとは言えない。

だけど今、ちよつとわかったような気がする。

ねえ、眼さん。

あたし、こんなに落ちて着いて弓を引いてるの、初めてです。

『――刹那に射切よ、由貴』

放たれた最後の矢が、心臓を貫くまで。
その刹那、確かにお前は生きている。

矢を放つ感覚はなかった。気付けば一本の矢が、黒いヤツの肩に食い込んでいた。ぐらりと傾く黒い体。

や……った。あたった。あたったんだ、あたし。

涙が滲む。眼さん、あたし、あなたに教えてもらえて本当によかった。

「……あれ？」

ま、ね。

確かにあたりはしたんだけどさ。よく考えてみると、肩つて別に急所じゃないのよ。

喜びから我に返ったときには、黒いヤツはこちらに猛ダッシュしてきていた。

「ちよ、ちよつとお！」

空気読めよ！ 倒れろよそこは！

そんなことはお構いなし。異様に細長い指が、あたしの鼻に触れる。口がパカリと開いた。

刹那に。

黒いヤツは、数十メートル横に飛んだ。

頭をしつかりと、光る矢が突き刺して。

飛んできた方を見ると、勿論そこには木々の隙間に、同じように光る弓を構えた姿のままの瞬さんがいた。

「……うそ……」

あんな遠くから撃ったの？ 瞬さんは、視力二・〇のあたしからですら顔が見えないほど遠くにいた。親指の爪くらいのサイズしかない。あそこから、的確に頭を撃ったってこと……？ ぶるり、と体が震える。

彼は本当に、眼さんの孫で。

そして特殊捜査戦闘部隊、メモリートの一員なのだ。

ジーン、ジンジンジン……

蟬、今だけはあんたを愛おしく感じるわ。帰って来た実感が湧くもん。

あの後、瞬さんに頭を打ち抜かれた黒いヤツは、黒い霧状になって、風に吹かれて消えてしまった（ついでにいうと分身は地面に溶けて行って、その場所には髪の毛だけが落ちていた）。それからは何事もなかったかのように空が明るくなって、携帯の電波も普通に返っていた。時計を見ると、まだ十二時にもなっていない。……刹那の出来事だった。

瞬さんと一緒に道を戻ってみると、やっぱり分かれ道なんてなくって。普通に、最初に渡ってきた橋のところまでたどり着くことができた。

「分身から危険信号が届いて、すぐ池川さんたちの所に戻って来れたのはよかったものの——池川さんが矢を撃ったときは、ホントどうしようかと思いましたよ。あのまま逃げてくれるのが一番安全だったのに」

うつ。確かにあれは調子に乗ってました……。というか瞬さん、あんな遠くからよく見えてるね。視力超いいじゃん。

「でも、じいちゃんからちゃんと教えてもらってるんだな、っていうのはよくわかりましたよ。弓矢のことだけじゃなくて、負けん気とかもね」

橋を渡りながら、笑う瞬さん。

「今だからこそ言いますが、最初池川さん、カラスに襲われたでしょう？ あれ、俺が『鳴弦』^{ひびげん}っていう、弓の弦を弾いて邪気を祓う技で追い払ったのは、実はカラスじゃないんですよ」

「え？」

「あのとき、池川さんの後ろに、ほぼびったりあの黒いのが張り付いていたんです。あのカラスたちは、それを追い払おうとしてくれてたんですよ。神様の使いとかだったのかな」

……………

これからはカラスの残飯あしりを、温かい目で見られるようになろうと思う。

「そっかいえば」

鳥居まで来ると、あたしは聞いてみた。

「瞬さんの任務って、アイツを倒すことだったんですか？」

「いいえ、俺の任務はこの地域の調査です。この後、俺より高位のメモリートが来ます。……でも見た限り、これは普通のメモリートの手に負えるモノじゃないですね。アイツもただの分裂した一部でしかないですし」

調査？ 元からこちらへん、色々起こってるってこと？

「大丈夫ですよ。そういうヤツらのために、俺たちがいるんですから。今回のことはしっかり報告しますし、これからも詳しく調査して、速やかに対処します。……とりあえず、分裂したうちの一人とはいえ、一部を倒したわけですから、こちらへんはしばらく安心ですし」

そ、それならいいんだけど。

階段を下り、神社から離れていくと、途端に暑さが戻ってくる。額の汗をぬぐいながら、瞬さんは言った。

「ここでお別れです。俺はこれから違う場所へ向かいますので」

「えっ、休みなしですかっ」

「これくらいのごときは日常茶飯事ですからね。池川さんは疲れたでしょうから、どうぞゆっくり休んでください」

では、とあたしとは正反對の道を行こうとして、瞬さんは立ち止まる。いたずらっ子のような笑顔で戻ってきて、あたしを手招いた。

手をメガホンの形にするものだから、耳を近づけてみる。

「……これ、多分オフレコなんですけど」

「は、はい」

「じいちゃんが、池川さんを弟子にした理由」

えっ、聞きたい聞きたい。

瞬さんは元の姿勢に戻って、自分の目元を指差した。

「池川さん、ここに泣き黒子あるでしょう？」

「え、あ、はい」

ありますね。

「しかも、池川『ユキ』さんて、おっしゃるでしょう？」

その通りです。

「俺のばあちゃん、ユキっていうんです。スノウの雪、ですけど。しかも、泣き黒子があっただんですね。俺が生まれる前に亡くなったってんで、会ったことないんですが、写真を見たことがあって」

瞬さんの、おばあさん。

つまり、眼さんの奥さん。

「そこまで一致したら、そりゃあじいちゃんも邪険にできませんよ。……だから、どうかこれからも弓道場に通ってあげてくださいね」

瞬さんの笑顔は、とても優しいものだった。

「じゃ、改めて」

『由貴』と『雪』。

同じ位置の泣き黒子。

そつと、目元に指を当ててみる。

瞬さんが手を振る。あたしもおじぎを返した。

「それでは、またどこかで会えたなら」

「ええ、またどこかで、きつと！」

人の縁というのは、不思議なものみたいだしね！